

## いま一度教育と研究について

森本 雍憲

ことしの始め箱根で開催された「第六回科学技術フォーラム」に参加する機会を得た。本会議は、科学技術会議・科学技術庁・日本科学技術振興財団の共催によるもので、副題に「未来材料開発へのフィロソフィー・物質研究のブレイクスルーを求めて」とあるように未来材料について関心を有する内外の産・学・官にわたる専門分野、所属機関を超えた第一線研究者の参加によって成り立っており、薬学部は私を入れて二人ということ、このような方向へ教室の研究はまだ進展していないこともあってかなりのとまどいを感じもしたが、講演の合間や交歓会等ではいろいろと感じたこと、考えたことがあったので城西大学薬学部の状況を思い合わせて述べてみたいと思う。

はじめに、本会議のことを少し紹介させていただくと、フォーラムは6つの分科会すなわち1、「ナノ材料を見る」、2、「スーパーコンピュータによる材料創成」、3、「人工細胞の高機能化」、4、「分子素子」、5、「ネオマテリアルのコンセプト」、6、「材料研究のストラテジー」から成り立ち、筆者は第3分科会に所属していた。各分科会はおよそ一三〜一四名で構成され、三日間のうちに一度各自の研究や今後の展開、さらには現時点ではとても実現可能とは思われない様なアイデアを述べるのが義務付けられており、各演者との討論要旨が翌朝配布されるという参加者にとっては好都合なシ

ステムが採用されていた。

このフォーラムで最初に感じたことは、各研究者があふればかりの研究に対する情熱と専門にとられない柔軟な考え方を持っていたことである。しかも、大変失礼ではあるが、もう還暦を迎えようとしているような感じの方が若さ、情熱、そしてflexibilityを持っていたのである。参加者の多くが最先端技術の応用研究をしており、それらの成果が今日の日本の繁栄を築いていると自負している様でもあったが、一方では、国際化社会における日本の位置を十分に認識し貿易摩擦の解消として内需拡大を真剣に考えなければならぬという話を聞かされると、何の会議に参加しているのかと一瞬我を忘れる感さえあり、科学者の思考及び行動様式を現在においてはかくも広いものにしなければならぬものなのかと感じるところであった。

また、多くの人が口々に基礎科学の重要性を協調していたが、彼等が応用研究をしている人間であることからその意見は説得力があった。科学でも最も大切なものは創造性であり、「日本人は創造的な仕事をしない」と良く言われているが、昨年度の朝日賞を受賞された米国立保健研究所の富沢純一博士も「日本人に創造性がないのではなく、創造性が応用的なことに片寄って適用されている」と指摘すると同時に「日本の基礎科学の水準が極めて高いもの」とは、

全体としてみたら決してその様な状態にない」と話しておられ、基礎研究の一層の重視を強調しておられる。富沢博士は、同時に文化の重要な担い手として芸術と並ぶ科学の位置が確立されていないまま今日に及んでいることに言及し、健全な科学の育成を願望しておられた。

この文化として科学を考える時、宮島龍興博士（理化学研究所）が、「人の行動としての科学」という小文の中で「科学そのものが、自然だけでなく、人文、社会まで同じ程度に学問化されることが不可欠のように思われる」といったことが思い出される。これらには、詩、演劇、歴史、経済などが勿論含まれている。科学が文化の一つの柱であることは、バランスのとれた学問が育っているかということになる訳で、私などはとても言えないが、宮島博士は、「専門家は自分のせまい関心の範囲で、面白い問題を追究するのが常であるから、違う専門がバランスのとれた発達することにたいして注目しない。難しいことがあっても、その方向の努力をしないと、——（中略）、急いで本気に取り組むことが大切である。」と言って職業として学問を行なっている人へ努力をうながしておられる。

さて、ここから本題であります。かのウェーバー先生の講演の演題ではありませんが、「職業としての学問」を行なっている者としては当然先に記した高名な先生のお話等に同意出来るのではないかと思われるものであり、そのように行われているのではないかと考えられるのですが、実際の日常的思考や行動を先のことと比較してみるといくつかの違いが直ぐに列記されるし、また、本学薬学部のおかれている状況とそこに存在する今日の課題を考えました。

当然のことをもう一度真摯に考えることが必要であるかと思われるわけです。私共は、大学にいるわけですが、この大学は何をなすべきかと問われると良く言われているように学術の研究と学生の教育を行うべきであります。「教育や研究においては自由が維持されており我々はそれを楽しんでおりますが、それは「象牙の塔」として大学が社会から隔離してよいということではないと思われれます。また、同じ社会の中で行われている教育や研究が、その共通する社会から類似の影響を受けることは当然であり、まして自由や独立といったものは、いつも社会と相互作用を有した状態で存在するものと考えたほうがよいのではないのでしょうか。

城西大学薬学部も創設以来すでに十四年がたちましたが、その間の科学技術の進展は目をみはるものがあり、それに伴って急激に社会が変化してきました。東洋の島国である日本は、もうその一挙手一頭足が世界から注目されるというほんの少し前までは考えられなような状態におかれており、薬学部の教育・研究もそれらの進歩と歩調を合せてきたかどうかを真剣に考えなければいけないと思っています。私は、ほんの少しですが、社会の変化速度が速くて、それに対して少し遅れ気味に物事が進んでいるように感じています。この遅れが生じる原因は、大変複雑なものであると考えられますが、根本的なものはそこに存在する人間の意識の問題ではないかと思っています。

私などはもう四十も半ばに達するのでそれほど若くはないのですが、まだ血気が多くこの少しの遅れが大変気にかかるわけですし、早く追い付きたく思うわけですし、学部内でいろいろとお話をして

いる時など、つい過激な意見などをはいてしまうことになっている様です。薬学のある部分はかなり応用色が強く、かつそのところはご多分にもれず昨今その進歩の度合は早くなっております。高齢化社会の出現に伴って医療システムそのものが次第に形を変え、そこにおける薬剤師の果たす役割もより一層高度なものになってきているわけです。薬学士とはいっても本学の場合、ほぼ薬剤師といってもよいわけですし、その様な次代をになう薬剤師の育成を最適な処方を組んで心がけているかという点、これまた難しい問題になっていますし、現実的な状況としての七年後の就学人口の減少と魅力ある大学といったことを考えると、私の焦燥感はいやがうえにも盛り上がりつつあるわけです。このようなことを全構成員が真剣に考えなければいけないのではないのでしょうか。そして出来ることから手をつけ、かつ難しいところにも挑戦しなくてはいけないと思っています。

教育という種まきとその後の稲穂の結実までに人は百年という歳月を要すると言うかもしれません。それが本当だと思います。このことから言えば早々とした成果を期待するのは無理なわけですが、問題は、その事を十分に認識し、今現在教育・研究に対してあふれる情熱を持ちかつバランスのとれた学問を育もうとする意識を持っているかということです。

社会の進歩から取り残されてはいけないことは当然でありまして、今こそ意識を新たにしてい、そして急いで（これまでに以上）本気に多くの課題に取り組むことが大切ではないかと考えています。

（もりもと・やすのり 薬学部教授）

